# 翻刻『源氏物語古註』（三十二）―藤のうら葉―

（山口県文書館蔵　右田毛利家伝来　細川幽斎自筆本）

熊本守雄

## 凡例

一、本稿は、山口県文書館蔵の右田毛利家伝来、細川幽斎自筆『源氏物語古註』（仮称。あるいは『源氏物語抄』と称すべきか。天理図書館ならびに京都大学に分蔵されている菊亭家旧蔵本では『源氏物語抄』とある。細川幽斎が慶長五年当時在住せし丹後田辺城を石田三成により攻囲せられた際に、智仁親王の許に献呈しようとした書の中に見えている『源氏物語抄』が、この右田毛利家伝来本であるかもしれない）の「藤のうら葉」一帖を、翻刻したものである。

一、「藤のうら葉」一帖は、二括りより成る列帖装である。即ち、料紙を何枚か重ねて二つ折りにした括りが、全部で二括りある。

第一括　料紙七枚十四葉（その内、端一丁は前表紙の見返しとして使われており、墨付は十三丁）

第二括　料紙六枚十二葉（その内、端一丁は後表紙の見返しとして使われており、墨付は十一丁）

料紙二十六葉の内、墨付は二十四丁、四十八面に及んでいる。

一、翻字にあたっては、できるだけ原本に添いながらも、次の諸点において、一部手を加えた。

1　注釈の項目（見出しの本文）即ち、源氏物語の本文には、解読の便を考えて、「　」を付し、示した。

2　原本にはないが、読みやすいことを目的として、注釈の本文に、仮に句読点を施し、又、私意により、濁点表記を加えた。

3　原本の本文丁数（墨付丁数）を示すため、各面の終わりに、〈1オ〉〈1ウ〉〈2オ〉〈2ウ〉などの記号をつけた。

4　原文では、注釈の本文の各項毎に（その冒頭に）、「一、」を記して、注釈を加えることを普通とするが、まま、改行して項目を立てながらも、「一、」のない場合がある。そうした項目の場合には、㈠と、かっこを付して示した。

5　現行の活字の範囲内で、可能な限り、原本の字体を再現する努力はしたが、異体文字・変体仮名は現行の活字の字体に改めた。仮名遣いや送り仮名は原本の通りである。

6　本書に疑問のある箇所及びミスプリントと誤認されやすい箇所

等には、（マヽ）と記した。

○　資料の翻刻を許可していただいた山口県文書館に感謝申し上げます。

「ふぢのうらば」、ことをもてまきの名とす。源氏三十九歳三月より十月まで。

一、「御いそぎのほども」とハ、あかしのひめぎミ入内のほど也。

「宰相中将」、夕ぎりは、くもゐのかりのことおぼして、ほれ〴〵しき心ちし給ふ也。

一、「わが心ながらしうねき」と、しうしんふかくかんにんするぞ、内府にしたがひていひよらバ、くもゐのかりゆるし給ふべき物をと夕ぎりおぼす也。

一、「せきもりの、うちもねぬべき」、引哥、人しれぬわがかよひぢのせきもりハよひ〴〵ごとにうちもねなゝん、内府の御心ゆるし給ふべきやうにおぼしよハり給ふとハきけど、人わろからぬやうにとおもふもくるしきとおぼしみだれ給ふ也。「ねんずる」ハ、堪忍也。

一、「をんなぎミも」とハ、くもゐのかりも、内府のかすめて中務のミやの事かたり給しのちハ、もしさもあらば、なにのなごりかハあらんとおぼす也。〈1オ〉

一、「そむき〴〵に」とハ、くもゐのかりと夕ぎり心〴〵に、もろこひし給ふ也。

一、「おとゞも」とハ、内府も、心たけからずおぼしよハり給ふと也。

一、「かのミやにも」とハ、中務のミやも、夕ぎりをしゐて契約し給ふことあらば、くちおしからんと内府おぼす也。

一、「又とかくあらめため」とハ、くもゐのかりをこと人に契約せんも、夕ぎりのためにも心ぐるしう、わがためにもかる〴〵しからんと、内府おぼす也。

一、「うち〴〵のことあやまり」とハ、くもゐのかりいひおかし給ひし事ハよにもりいでんとおぼして、とかくまぎらハして、夕ぎりをかたらひよせんと内府おぼしたつ也。「うへハ、つれなくて」とハ、源氏と内府うへよきやうにて、心のうちハうらみとけ給ハぬ御中なると也。

一、「ゆくりかにいひよらん」とハ、卒爾にハ夕ぎりにいひよりにくゝ内府おぼして、こと〴〵しくハもてなしにくゝて、いかならんついでにかと〈1ウ〉おぼす也。「三月廿日大ミやの御き日」とハ、内府の御はゝ大宮ののき日にて、ふかくさの極楽寺にまうで給へる也。大ミやの第三回忌也。「きんだち」とハ、内府のきんだち、かんだちめもあまたまいり給へる也。「宰相中将」とハ、夕ぎり、上達部におとり給ハぬ也。

一、「このおとゞを」とハ、内府を、夕ぎりつらしとおぼせば、見えたてまつり給ふも心づかひし給ふ也。「おとゞも」と、内府も、夕ぎりにめとゞめ給へる也。

一、「御ずきやう」とハ、法物布施也。夕ぎりハ、ましてうばミやの御とぶらひなれば、よろづをとりもち給ふ也。

一、「おとゞ、むかしを」とハ、内府、大宮の御事おぼしいでゝうそぶきながめ給ふ也。うたなどうち吟じ、うそ吹ながめ給ふ也。夕ぎりも、あハれにうちしめりてながめ給ふ也。「しめりて」、しづまりて也。

一、「あまげあり」とは、雨のけしきに、人〻かへさをたちいそぎさハぐ也。〈2オ〉

一、なをながめ入て夕ぎりおハしますを、くもゐのかりのことをおぼすかと、内府心ときめきに給ふ也。「心ときめき」ハ、心いそぎ也。

一、「袖をひきよせて」とハ、夕ぎりを内府ひきよせ給て、「などか、こよくハかうじし給へる」とハ、勘當し給へるとの給ふぞ、「けふの

みのりのえんをも」とハ、夕ぎりけふのうばミやのためをこなハせ給ふミのりのゑんをおぼさば、われにつミゆるし給へと内府の給ふ也。

一、「すぎにし御おもむけも」とハ、うばミやも内府をたのミたてまつれとこその給ひつれと、夕ぎりの給て御ゆるしなき御けしきに、はゞかりつゝと申給ふ也。あハたゞしき雨風に、きほひかへり給ふハ、夕ぎりいますこしもこゝにやすらひ給ハゞ、内府のいらへむつかしからんに雨風にいそぎかへり給たる、かける心珍重〳〵といへり。

一、「いかゞおぼしつらん」とハ、内府いかゞおぼしてうらみの給ひつらんと、よとゝも〈2ウ〉に心にくもゐのかりをかけておぼすあたりの事なれば、とやかくやとおもひあかし給へる也。「よとゝも」とハ、常住といへる心也。

一、「こゝらとしころの」とハ、おほくのとしごろ心をつくしたるしるしにや、内府もはかなきつゐでもがなとおぼすと也。「こゝら」ハ、おほくといへる心也。

一、「おまへのふぢの花」とハ、四月ついたちごろ、内府のおまへのふぢ、おもしろきに、あそびし給て、「頭中将して御せうそこ」とハ、かしハ木を御つかひにて、「ひといの花のかげ」とハ、極楽寺にての事也。内府の文言也。

一、「わがやどのふぢのいろこきたそがれにたづねやハこぬ春のなごりを」、「春のなごりを」、四月ばかりなれバ也。又、大宮のなごりをとひ給へと也。

一、「まちつけ給へるも」とハ、夕ぎり内府の御つかひまちえて、心ときめきし給ふ也。「時めき」ハ、うれしき時にあふ也。

一、「中〳〵におりやまどハん藤の花たそがれ時のたど〳〵しくハ」、くもゐ〈3オ〉のかりゆるされぬほどは、しのびにもことかハしたるを、ゆるされば、なか〳〵におもひみだれやせんと也。「くちおしくこそおくしにけれ」とは、藤をおりとらんとよまぬハおくしたる也。「とりなをし給へ」とハ、かしハぎうたをなをし給へと夕ぎり給ふ也。

一、「御ともにこそ」とハ、かしわ木、夕ぎりの御ともしてまからんと申給ふ也。

一、「わづらハしきずいじんハ」とハ、はゞかりおほきともハ、いなとて、かしハ木をかへし給たる也。「おとゞのおまへに」とハ、源氏に、かく内府つかひありしと夕ぎり申給へる也。

一、「おもふやうありて」とハ、くもゐのかりに契約にてやあらん、さもすゝミての給ハゞこそ、すぎにしかたのうらみもとけめと、げんじの給へる。「心おごり、ねたげなり」とハ、無念とおぼすと見えたる也。

一、「さしも侍らじ」とハ、くもゐのかりの事にてハ侍らじ、ふぢのゑんし給ふ〈3ウ〉べきにてこそあらめと夕ぎりの給ふ也。宴ハ、さかもり也。

一、わざとつかひさゝれたるに、はやくおハしませと、ゆるし給へる、いかならんと夕ぎりした心にハおぼす也。「なをしの色こくてかろびたれ」とは、夕ぎりのなをしの色こきふたあひハかろ〳〵し、うすふたあゐき給へとの給て、源氏わが御れうの心ことなるを、夕ぎりにきせ給へる也。

一、「非参議」とハ、二三位の中将などをいふ也。なつハわかき人ハこきふたあゐ、としよりたる人ハうすふたあゐのなをしき給へる也。

一、「わがおかたにて」とハ、夕ぎりわがつぼねにて、さうぞくひきつくろひてけさうじて、まいり給へる也。

一、「あるじのきんだち」とハ、内府の御息たち、かしハ木をはじめて、うちつれいであひ給て、夕ぎりをむかへいれ給へる也。なを夕ぎりいづれのきんだちにもすぐれて見え給へる也。〈4オ〉

一、「おとゞ」とハ、内府、おましひきつくろハせ給ふ御ようをろから（マン）ぬ也。「おまし」ハ、座敷也。「ようい」ハ、用意也。内府も、かうぶりなどあらためて夕ぎりにたいめんし給ふ也。きたのかた、女房たちも、夕ぎり見給へ、きやうさくになりゆく人との給ふ也。「きやうさく」ハ、すぐれたる人といへる心也。あざやかなる所ハ、夕ぎり源氏にまさりてミゆるなどほめ給ふ也。

一、「かれハいとせちに、なまめかし」とハ、源氏ハうつくしくあひきやうづき、「みるにゑましく」とハ、見ればうちわらハるゝ心ちし給へると也。

一、「これハざえのきハまさり」ハ、夕ぎりハ才覚まさり、おゝしくすくやかにたらひたるとの給ふ也。「おゝしく」ハ、おとこ〳〵しき也。

一、「むべ〳〵しき」とハ、げに〳〵しく、実めやかなる物語ハすこしし給ふ也。

一、「この花のひとり」とハ、引哥、なつにこそさきかゝりけれふぢの花〈4ウ〉まつにとのミもおもひけるかな、「いろもはた、なつかしきゆかり」とは、くもゐのかりをした心にして、夕ぎりをゆかりによせて、むこにせんのおもむきを、内府の給ふ也。

一、「月ハさしいでながら」とハ、七日ばかりの夕月夜なれば、さやかならぬと也。

一、「おとゞ、ほどなく」とハ、内府そらゑひし給て、夕ぎりにさけしゐ給ふ也。

一、「さる心して」とハ、夕ぎりもいたくよハじとすまひ給ふ也。いやがり給ふ也。

一、「きミハ、するのよに」とハ、夕ぎりはあめのしたのいうそくとなにの職にも不足あるまじき人とよ人もおもへるを、よハひふりぬるわれをなど思ひすて給ふぞ、内府の給ふ也。

一、「もんじやくにも家礼」とハ、書籍にも、いへのれいといふことありと也。史記云、高祖幸父太公家以家礼敬之、高祖雖子君也。太公雖父臣下也。内府ハおやかたなるを、夕ぎりうやまひ給ハぬ〈5オ〉の心也。「なにがしのをしへ」とは、夕ぎりの師匠のをしへも、をろかならじをと内府の給ふ也。「いたうなやまし給ふ」と、くもゐのかりにうと〳〵しくなり給ひて、われにおもひなやませと、内府うらみの給ふ也。「ゑひなき」とハ、えひておもふ事のこさずいふ心也。

一、「むかしを思ふ給へいづる」とハ、おほぢおとゞうばミやの御かハりにハと、内府を身をすてゝもとたのミたてまつると夕ぎりの給て、いかに御らんじなすにか、もとよりをろかなる心のをこたりにこそとの給ふ也。「をこたり」とハ、過怠といへる心也。身のとがといへる心也。

一、「御ときよくさうどきて」とハ、時宜よくとりはやしての心也。

一、「ふぢのうらばのとずし給ふ」、引哥、はる日さすふぢのうらばのうらとけてきミしおもはゞわれもたのまん、とうちずんじ給へるけしきを見て、かしハ木藤のえだをおりて、夕ぎりの〈5ウ〉さかきにくわへ給へる也。「もてなやむに、おとゞ」

一、「むらさきにかごとはかけん藤のはなまつよりすぎてうれたけれども」、くもゐのかりにうらみかけんと也。くもゐのかりのをろかにおハせしゆへにこそ、夕ぎりまつほどすぎてハおハしたれと内府よミ給ふ。をんなをむらさにたとへいへば也。「かごと」ハ、うらみ也。「うれたければ」、うれハしけれと也。愁也。

一、「宰相、さかづきをもちながら」とハ、夕ぎり内府ハおぢなれば、家礼をけしきばかりはいし給たる也。天盃ハ庭上におりて舞踏し給ふ也。これハ、おぢ・おひの中なれば、けしばかりと也。

一、「いくかへり露けき春をすぐしきて花のひもとくおりにあふら

ん」、いくとせか、くもゐのかりをこひわびて、なみだをながし、内府の心とけ給へる春にあふらんの心也。「花のひもとく」を、内府の心とけ給し〈6オ〉によそへて、夕ぎりよミ給へる也。「頭中将に」とハ、さかづきかしハぎに夕ぎりさし給へる也。

一、「たをやめのそでにまがへる藤の花みる人からやいろもまさらん」、くもゐのかりも、夕ぎりの見はやし給ハゞこそいろもまさり給ハめと也。「たをやめ」とハ、たをやかなるをんなといへる心也。美女をいふ也。これもむらさきを女にたとへて也。藤ハむらさきいろの花なれば也。

一、「つぎ〳〵ずんながれ」とハ、さかづきの順ながれて、うたもおほかりつれど、かきとゞめぬと記者也。

一、「弁の少将、あしがきをうたふ」、引哥、あしがきまがき、まがきわけ、てふこすと、おひこすと、われ、二だん、てふこすと、たれ〳〵かおやにまうよこしけらしも、三段、とゞろける、このいへの、をとよめ、おやに、まうよこしけらしも、四だん、あめつちの、神も〳〵、しうしたべ、〈6ウ〉われハまうよこし申さず、五だん、すがのねの、すがなきことを、われハきく、われはきくかな、

一、「おとゞ、けやけうも」とハ、尤の字也。もつとも、はゞかりをかずうたひたるかなの心也。夕ぎりをこなたよりよびたるとおもへば無念を、夕ぎりをしてわたり給たる心にうたひ給たるを、尤なると内府の給て、としへにけるいへのといふ所よりつけてうたひ給ふこゝ、おもしろきと也。うちとけあそび給て、物おもひのこらずなり給ふ也。

一、「そらなやミして」とハ、夕ぎりそらゑひして、「まかでんそらもほと〳〵しうこそ」とハ、ほとろ〳〵しうてと夕ぎり給ふ也。ほとろ〳〵しとハ、物わびしくての心也。なげきこる人いる山のをのゝをとほと〳〵しかるめをもみるかな、此うたも木きるをと物をそろしきとよそへたる也。

一、「とのゐ所」とハ、かしハ木のよるのおとゞゆづり給へと夕ぎりの給也。〈7オ〉

一、「あそんや、御やすミ所」とハ、かしハ木、くもゐのかりのつぼねへ夕ぎりひきいれたてまつれと内府の給ふ也。「あそん」とハ、中将の朝臣といへる官のした字ばかりをよび給ふ也。「おきないたうゑひすゝみて、むらい」とハ、無礼也。「中将、花のかげのたびね」とハ、くもゐのかりのかたへのミちびきハいかゞあらんと、かしハ木の給へば、「まつにちぎれるハ、あだなる花かハ」とハ、わが心のかハらぬよしを、夕ぎり松にたとへての給ふ也。引哥、ときはなる松にちぎれる藤なれどをのがときとぞ花ハさきける、

一、「中将心のうちに」とは、かしハ木、内府まけて夕ぎりよびよせ給へるハむねんにハおもへども、夕ぎりのありさまおもふやうなる人なれば、くもゐのかりにちぎり給ふは、よきあハひとおもひてみちびき給ふ也。

一、「おとこぎハ」とは、夕ぎりは、内府のいつきかしづき給へるを、わが身いとゞ心おごりし給ふ也。「女ハ」とは、くもゐのかりは、はづかしおぼさるゝも、〈7ウ〉としたけ給たるしるしなるべし。「よのためしにも」、引哥、恋するにしぬる物とハきかねどもよのためしにもなりぬべきかな、

一、「心もてこそ」とは、わがかくよそ心もなくてとし月すぐしつればこそ内府にゆるされ奉りつれ。あハれとくもゐのかりハしり給ハぬかと也。弁の少将のあしがきうた、いかゞくもゐのかりきゝ給たる、わが内府に懇望してまいりたるやうに、少将うたひ給たるハ、心いたましかりしと夕ぎりの給ふ也。「いたきぬしかな」とハ、心いたましき人かなといふ心也。川ぐちのと、かへしにうたひたくおもひつると也。川ぐちのうたハ、しのび〳〵に心をかハしたるを、内

府ハしり給ハで、いまはじめてあひたるやうにおぼさるゝうたひかへしたくおもひたるの給へば、きゝぐるしとくもゐのかりおぼす也。引哥、かハぐちの、せきのあらがきや、せきのあらがきや、まもれども、われ、二だん、いでゝわれぬや、いでゝわれねぬや、せきの〈8オ〉あらがき、伊勢也。内府のかたくまもり給ひたれど心ハかハしたると也。

一、「あさき名をいひながしける川ぐちハいかゞもらししせきのあらがき」、内府の心をあさくハなどいひなし給ふぞ、せきをもるゝやうにて夕ぎりに心かハしたることはなかりしと、くもゐのかりよミ給ふ也。

一、「もりにけるくきだのせきを川ぐちのあさきにのミもおほせざらなん」、みちのくのくきだのせきも人まハあれば、川ぐちのせきのミあさきとハいハじと也。心ハ、いかやうにおやのまもるをんなにも、人まありて、あひみるならひなれば、内府にのミあさ名ハおほせじと也。

一、とし月のつもりをの給て、ゑひにかこちて、あくるもしらず、ねすぐし給ふを、人〻もいひわづらひぬるを、内府したりがほなるあさいかなどの給ふ也。「あさい」ハ、あさね也。

一、「ねくたれの御あさがほ」とハ、夕ぎりの御すがたみるかひありと也。〈8ウ〉引哥、ねくたれのあさがほの花朝ぎりにおもかくしつゝ見えぬ君哉、

一、「けふハ中〳〵」とハ、しのび〳〵の夕ぎりのふミにハ、かへしをくもゐのかりはづかしげなくかき給しを、けふさしあらハしてのふミにハ、内府にはぢてかへしし給ハぬを、女房たちつきしろひて、わらふ也。

一、「おとゞわたり給て」とハ、内府おハして、夕ぎりの御文ミ給ふ也。

一、「つきせざりつる御けしき」、文言也。くもゐのかりつれなくみえ給しけしきに、たへがたくおもひきえぬべき心ちするを、とがむなよと、うたにかゝることば也。

一、「とがむなよしのびにしぼるてもたゆミけふあらハるゝ袖のしづくを」、としごろハ、てもたゆきほどしのび〳〵しぼりつる袖を、けふよりハ人めをもはゞかるまじきを、とがむなよと、夕ぎりよミ給ふ也。「なれがほなり」とハ、くもゐのかりになれ〳〵しく、夕ぎりのうたよめると、内府お〈9オ〉ぼして、手をかきあがり給へるとほめ給ふ也。「むかしのなごりなし」とハ、夕ぎりうらみ給しとし月のなごりなく、内府ほめ給ふ也。

一、「御かへりいできがたければ」とハ、しのび〳〵のときハ、なに心なくかへしかき給しを、けふハ中〳〵かきにくゝ、くもゐのかりおぼさるゝ也。

一、「みぐるしや」とハ、雲ゐのかりはぢて、かへしかき給ハぬ、みるもくるしきとて、内府わがまへにてハかきかね給ふもことハりとて、わたり給へる也。

一、「御つかひのろく」とハ、夕ぎりのつかひになべてならぬひきいで物し給へる也。「中将」とハ、かしは木つかひもてはやし給へる也。

一、「かくろへありきし」とハ、夕ぎりの御つかひ、しのび〳〵にまいりつるを、けふはおもゝちなど人〻しくふるまふ也。

一、「六条のおとゞも」とハ、げんじも、内府のうちとけて夕ぎりよびとり給へる事きゝ給て、うれしくおぼす也。〈9ウ〉

一、「宰相、つねよりも」とハ、夕ぎり、つねよりもひきつくろひてまいり給へる也。

一、「けさハ、ふミなど物しつや」とハ、くもゐのかりにふミまいらせ給たるかと、源氏の給ふ也。「さかしき人も」とハ、賢人も、をんなのミちにハあやまちあるを、夕ぎり心みださずして、内府よりゆる

されて、くもゐのかり本意とげ給たるハ、人にぬけたる心と源氏の給ふ也。

一、「おとゞ御をきての」とハ、内府の心だてすミたるやうに、くもゐのかりをひきこめ給しなごりなくくづおれて夕ぎりよびとり給しを、人もいひいづることもあらんに、おごりてあだ〳〵しきふるまひなどし給ふなと、源氏の給ふ也。「くづおれて」とハ、おもひくだれて也。

一、「さこそおほきなる」とハ、内府の心ばへおほやうなるやうなれど、した心おゝしからずくせある所つきたる人と、源氏の給ふ也。「おゝしからず」とは、おとこ〳〵しからず也。「めやすき」とハ、夕ぎりくもゐのかりよき〈10オ〉あハひとおぼさるゝ也。

一、「御子ともみえず」とハ、夕ぎり源氏の御子のやうにもみえ給ハず、御きやうだいのやうなると也。「ほか〳〵にて」とハ、よそにてひとり〳〵見たてまつれば、夕ぎりそのまゝげんじのやうにみえ給ふ也。おまへにてとふたりならべて見たてまつれば、さま〴〵にげんじ夕ぎりおとりまさりなくみえ給ふと也。

一、「おとゞは、うすき御なをし」とハ、源氏ハ、しろき御ぞのからをり物めきたるに、うすはなだのなをしき給へる也。「さいしやうどのハ」とハ、夕ぎりはハ、「ちやうじぞのこがるゝまで」とハ、にほひふかくたきしめたる也。しろきあやのなつかしさに、ちやうじぞめかさねてき給へる也。「ちやうじぞめ」とハ、黄色のこき也。なをしハ、こきはなだき給へる也。

一、「くわんぶつゐてたてまつりて」とハ、寺より六条院へほとけゐてたて〈10ウ〉まつりて、御導師まいり給て法事をこなふ也。「ゐて」ハ、つれて也。これハ四月八日佛生會也。「御かた〴〵より」とハ、花ちる里、あかしのうへなどより法事の僧のふせなどいだし給へる也。

「おまへのさほうをうつして」とハ、きんちうのさほうをうつして、源氏の御まへの法事させ給ふ也。

一、「きんだちなども」とハ、公卿、てん上人も、まいり給て、「うるハしき御前よりも」とハ、きんちうよりも、はれがましくて人〻おくしがちなると也。「宰相ハ、しづ心なく」とハ、夕ぎりは、くもゐのかりの御かたに心いそがれて、しづかなる心ちもなく、おぼさるゝを、なさけだち給ふわかき女房たちハ、雲ゐのかりをねたむ也。「なさけだち」とは、夕ぎりのちぎりたのめ給へる六条院の女房たちの心也。

一、「としごろのつもり」とハ、くもゐのかりをとしごろの恋しとおぼしたりしおもひとりそへて、「ミづもらんやハ」、引哥、などてかくあふごかたミに〈11オ〉なりにけんミづもらさじとむすびし物を、

一、「あるじのおとゞ」とは、内府も、夕ぎりをちかうて見給へば、心まさりし給ひてかしづき給へる也。「まけぬる」とハ、夕ぎりにまけてよびとりたるハくちおしけれとつミとがも残るまじく、夕ぎりのとしごろよそ心なくまめやかにてすぐし給し心を、ありがたく内府おぼす也。「女御の御ありさま」とハ、こうきでんよりも、くもゐのかりかたちよくおハしければ、まゝはゝのきたのかたにさぶらひ給ふ女房たちなどハ、心よからずおもふ也。

一、「あぜちのきたのかた」とハ、くもゐのかりのはゝぎミハ、夕ぎりちぎりかハらずあハせ給たるを、うれしくおぼす也。

一、「六条院の御いそぎ」とハ、あかしのひめぎミの入内ハ、「廿日あまりに」とハ、四月廿日あまりとさだめ給へる也。〈11ウ〉

一、「たいのうへに、ミあれにまうで給ふ」とハ、みあれの神殿にまいり給ふ也。まつりの日のあかつきまいり給て、かへさに、まつりみ給ふ也。「ミあれ」とハ、玉よりひめ雷神うミ給ふ所也。御形ともかく也。又、御生所ともかく、すなハちなるかミのかたちをあらハし給へる心也。たゞすのかミハ玉よりひめ也。「れいの御かた〴〵」と

ハ、花ちる里、あかしのうへなどを、むらさきのいざなひ給へど、むらさきのうへにけをされんが心やましとて、此人〻いで給ハぬ也。

一、くるま二十ばかりにて、「ことそぎたる」とハ、ことのそぎて、むらさきのうへ見物し給ふもけハひことなると也。「ことなる」ハ、けハひ別なるといへる心也。あかつきミあれにまいり給て、かへさにハまつり見給ふミけしきいで給ふ也。「御かたぐ〳〵のねうばう」と、花ちる里、あかしのうへの女房たち、むらさきのうへの御ともにいでたる也。「おまへ、〈12オ〉所しめたる」とは、むらさきのうへのおハしますおまへに、くるまたてつゞけたるがいかめしう、とをめよりもいちじるしくみえたると也。

一、「中宮のはゝミやす所」とハ、あふひのうへとかのミやす所のくるまあらそひを、げんじおぼしいでゝ、時よにあひて心おごりして、なさけなきことしいづるハ心なき人のわざと源氏の給ふ也。

一、「おもひけちたりし人も」とハ、あふひのうへも、ミやす所のうらミおひてなくなり給し、「のこりとまれる人」とハ、夕ぎりハ、かくたゞ人にて、わづかに宰相までこそなりのぼり給けれ、ミやす所の御子の斎宮ハ、中宮までなりのぼり給へるをみれバ、さだめなきよなれば、ゆくすゑ心もとなきとげんじの給ふ也。

一、おもふまゝにて、いけるかぎりすぐさまほしけれど、のこり給はん夕ぎりあかしのひめぎミなどのすゑのよに、もしたとへなく〈12ウ〉をとろへ給ひやせんとおもへば、心にまかせてよの中ありにくきと源氏の給へる也。かんだちめなど御さじきにまいりつどひ給へば、げんじは公卿てん上人のおハしますかたへいで給ふ也。

一、「このゑづかさのつかひ」とハ、かものまつりの勅使に、かしハ木たち給ふ也。「大とのにて、いでたちの所」とハ、内府のかたにて、かしは木いで給ふ所より、くぎやうてん上人、源氏の御さじきにまいり給たる也。

一、「藤内侍のすけも」とハ、まつりのつかひに、夕ぎりのおもひ人、かのこれミつのむすめもたつ也。夕ぎりのおもひ人にて、おぼえことなれば、きんちう春ぐうなど源氏よりも御心よせし給へる也。

一、「宰相の中将」とハ、夕ぎりも、藤内侍のすけのいでたつ所までとぶらひ給へる也。「うちとけずあハれをかハし」とハ、平懐にもあらず、よしありてなさけかハして、藤内侍を夕ぎりおぼしたると也。

〈13オ〉

一、「やんごとなきかたに」とハ、くもゐのかりを本臺に夕ぎりさだめたまへるを、藤内侍のすけねたましくおもへる也。

一、「なにとかやけふのかざしよかつミつゝおぼめくほどになりにけるかな」、心ハ、藤内侍にあふことのおぼつかなきほどにへだゝりたる也。あふひをあふによそへて也。「けふのかざし」とハ、まつりのつかひ、あふひかつらをかざしにすれば、あふひを見つゝもあふ事とをざかるハいかゞせんと也。

一、「おりすぐし給ハぬ」とは、かやうにとひ給ふべきおりふしすぐし給ハぬばかり、うれしとおもひて、くるまにのるほどなれど、かへしたる也。

(一)、「かざしてもかつたどらるゝくさのなハかつらをおりし人やしるらん」、心ハ、夕ぎりわれにあふことのたど〳〵しくおぼめくとの給ふハ、かつらをおり給ひしそなたこそしり給ふべけれ、われハいかゞことハりを申べきとよめる也。夕ぎりハ学章にてましませばと藤内侍いへる也。これ〈13ウ〉も、あふひとかつらとをした心にもたせてよめる也。「はかせならでハ」とハ、夕ぎり、儒者のはかせにておハすれば、かくいへる也。

一、「ねたのいらへや」とハ、むねんなるへんかと夕ぎりおぼす也。「なをこの内侍にぞ」とハ、此藤内侍を夕ぎりおもひはなち給ハで、かよひ給へると也。

一、「御まいりは、きたのそひて」と、あかしのひめぎミ入内にハ、むらさきのうへそひ給ふべきを、なが〳〵しうハきんちうにおハしますまじきを、あかしのうへをやひめぎミにそへ給べきと源氏おぼす也。

㈠、「うへも」とは、むらさきのうへも、つゐにあかしのうへとひめぎミしたしくそひ給ハでハのことなれば、かくへだてゝすぐし給ふを、かのあかしのうへもかなしとおもひなげかるらん、このひめぎミの心にも、やう〳〵まことのはゝぎミのことをあひミたくおぼすらん、かたぐ〳〵心をかれし〈14オ〉此おりにあかしのうへそへんとむらさきのうへおぼす也。

一、「まだいとあへかなる」とハ、ひめぎミはかなくおハしませば、めのとなども見をよぶことばかりこそいさめをしへなどすれ、われハつとそひてきんちうにさぶらうまじきに、あかしのうへひめぎミにそへなばうしろやすかるべきと、むらさきのうへおぼして、源氏にかやうにおもひよりたるとの給へば、いとよくおぼしよるかなと源氏おぼして、あかしのうへにかくむらさきのうへゆるし給ふとかたらひ給ふ也。

一、「おもふ事かなひはつる」とハ、あかしのうへひめぎミにそひてあらんとおもふ事かなひたる、人〻のさうぞくなにかの事も、むらさきのうへにおとらじといそぎたち給ふ也。

一、「あまぎミ」とハ、あかしのうへの御はゝあまぎミ、此ひめぎミの御おひさき見たてまつるよもやと、いのちをしうねくなしてねんじ給ひ〈14ウ〉けるを、いかにしてかハひめぎミをあまぎミに見せたてまつらんとあかしのうへおもふもかなしきと也。「しうねく」とハ、執心ふかくいのちおしミてといへる心也。

一、「そのよハ、うへそひて」とハ、はじめて入内のよハ、むらさきのうへそひ給てまいり給へる也。

一、「御てぐるまにも、たちをくれ」とハ、むらさきのうへハ、てぐるまにのり給はんに、あかしのうへうちあゆミ給はんハ人めわろからんを、わがためにハくるしくもおもハねども、ひめぎミの御ため玉のきずならんと、わがかくながらへぬるを、心ぐるしとあかしのうへおぼさるゝ也。

一、「まいりのぎしき」とハ、ひめぎミ入内の儀式、人のめをどろくほどにハすまじきと、源氏おぼしつれど、つねのさまならずいかめしきと也。

一、「かしづきすへ」とハ、ひめぎミをかざりたてゝ見給ふに、まことのわが子に〈15オ〉ておハしまさばと、むらさきのうへハおぼす也。

一、「おとゞも、宰相のきミも」とは、源氏も、夕ぎりも、むらさきのうへの実子なき事を、あかぬ事におぼす也。「あかぬ」ハ、不足也。

一、「三日過してぞ」とハ、入内三ケ夜の祝言すぐして、むらさきのうへハまかで給へる也。あかしのうへ、たちかハりてまいり給へるに、むらさきのうへたいめんし給へる也。「おとなび給ふ」とハ、ひめぎミ入内し給ふまで、あかしのうへにたいめんなくてへだゝりしとし月の事紫上の給ふ也。いまよりハうと〳〵しきへだてのこるまじきと紫上の給ふ也。これがうちとけ給へるはじめとたがひにおぼす也。

一、「物うちいひたるけハひ」とハ、あかしのうへのけハひを、むべこそげんじのよしあるやうおぼしけれと、紫上おぼす也。「むべ」ハ、げにもといへる心也。

一、「又いとけだかう」とハ、むらさきのうへの御けハひを、そこらの御中に〈15ウ〉すぐれて源氏のおぼさるゝも、ことハりとあかしのうへおぼす也。「そこら」ハ、おほくの人の中にといへる心也。

一、「かうたちならびきこゆる」とハ、かくむらさきのうへにたちならびたてまつるハ、わがちぎりあさからぬとおもふ物ながら、てぐる

まなどゆるされ、女御のくらゐにことならぬむらさきのうへの御ありさまおもひくらべられて、わが身のかずならぬを、かなしとあかしのうへおぼさるゝ也。

一、「ひゐなのやうなる」とハ、ひめぎミのうつくしさを見たてまつるハ、ゆめの心ちすると、明石のうへおぼす也。「ひとつ物とぞ」、引哥、うれしきもうきもなみだハひとつにてわかれぬ物ハ心なりけり、としごろかなしうおもひしづミつる、いのちものべまほしう明石上おぼす也。すミよしの神の御しるしとをろかならずおもふと也。

一、「心をよバぬ」とハ、明石のうへいたりふかき人なれば、おもふやうにひめぎミ〈16オ〉をかしづきたてまつり給ふ也。

一、「大かたのよせおぼえ」とは、源氏の御むめといふおぼえよりはじめ、なべてならぬ御かたちありさまなれば、春宮も、わかき御心ちに心ことにおぼしめしける也。「いどミ給へる御かたゞ〳〵の」とハ、春宮にまいり給へりしひめぎミ、あかしのひめぎミにあらひ給ふやうなれば、そのミやづかへ人など、あかしのうへのひめぎミにそひ給へるを、きずにいひなしなどすれど、それにけたるべきもてなしならず、いまめかしくならびなく心にくゝもてなし給ふ也。はかなきあそびわざにもあらまほしうし給へば、てん上人どもゝ心かけたる女ばうなどのありさまさへ、よしありてとゝのへなし給へる也。あかしのうへの心ばへすぐれたる也。

一、「うへもさるべきおりふし」とハ、むらさきのうへもおり〳〵春宮にまいり給ふ也。「御中らひ」とハ、紫上とあかしのうへいよ〳〵御中うちとけ〈16ウ〉給へるハかうこそあらまほしけれといへるやうなるの心也。

一、「さりとて物なれず」とハ、さありとてさしすぎてなれ〳〵しくもなく、むらさきのうへよりあなづられたてまつるべきことなくもてなし給へる明石上のありさま心ばへ也。

一、「おとゞも」とハ、源氏もながゝるまじきとおぼさるゝ御よのこなたにひめぎミの入内し給へるさま御らんじて心おちゐ給たる也。

一、「よにうきたるやうにて」とハ、夕ぎりのくもゐのかりにおもひわびておハしたりしもおもひかなひてめやすきさまにしづかにておハしませば、源氏の御心おちゐ給て、ほいもとげんとおぼす也。「ほいとげん」とハ、よをのがれんとおぼす也。

一、「たいのうへの」とハ、紫上を、見すてがたくおぼすも、あきこのむ中宮おハしませば、むらさきのうへハおやこの契約なれば、たのもしきと〈17オ〉げんじおぼす也。「此御かたも」とハ、あかしのひめぎミも、むらさきのうへの御子とよにしられ給たれば、をろかにハおぼされじとたのもしきと也。

一、「なつの御かたの」とハ、花ちる里の、花やかなる事なくておハしませど、夕ぎりを御子のやうにおぼさるれば、うしろめたからぬと、みなとりどりにおぼしゆづりて心やすきと源氏おぼさるゝ也。

一、「あけんとし、よそぢになり給ふ」とハ、きたるとし、四十になり給ハん源氏の御賀のいそぎを、おほやけよりはじめたてまつりて、よの中ひゞかしてもよほし給ふ也。そのあき、大上てんわうになずらへてくらゐさづかり給ふ也。おりのみかどのくらゐ也。「みふくハゝり」とハ、くに〳〵のたミのこうもつをとり給ふ也。食封といへる也。大上てんわうハ、三千戸とり給ふ也。たミのかまどのかずの事也。たゞし、三千戸のうへにもとり給ふべきと也。位田千町とらせ給ふ也。〈17ウ〉

一、「つかさかうぶり」とハ、官爵人にゆるし給ふ事おりゐのみかどとおなじごとくをこなひ給ふ也。「むかしのれいのれいをあらためて」とハ、源氏此ほど大政大臣にておハしましたるを、あらためて院号をうけ給へると也。又まことの大上天皇のむかしのれいをあらためずしてと用る儀もあり。「院司どもなり」とハ、六条院をつかさ

とる諸司、きんちうのやうに源氏めしつかひ給ふ也。
一、「うちまいり給ふ事」とハ、大上天皇のくらゐなれば、禁中にまいり給ふ事、まれなるべきことを、源氏あかぬ事とおぼさるゝ也。
一、「かくてもなをあかず」とハ、みかどハ源氏に院号をゆるし給ひてもまたも不足におぼさるゝ也。げんじにくらゐをゆづりたくおぼしめさるゝといへる心也。
一、「内大臣あがり給て」とハ、内府、大政大臣になり給たる也。〈18オ〉
一、「宰相中将」とは、夕ぎり、中納言になり給たる也。「よろこびにいで給ふ」とハ、夕ぎり中納言になり給たるよろこびにいで給へるを、内府見給ひて、中〳〵のミやづかへよりハ、くもゐのかり夕ぎりにゆるし給たるを、うれしとおもひなをし給ふ也。
一、「をんなぎミの」とハ、くもゐのかりのめのとの、「六位すくせ」と、夕ぎりのことをいひしを、おり〳〵おもひいで給へば、きくの花につけてうたをとらせ給へる也。「あさミどりわかばのきくを露にてもこきむらさきの色とかけきや」、心ハ、わが六位のあさみどりのいろをぬぎかへて、こきむらさきをきるべき大輔のめのとハおもひたるかとおもハぬかと夕ぎりよミ給へる也。引哥、むらさきの色こきまでハしらざりき御代のはじめのあまのはごろも、中納言こきむらさきの色ゆるされたる時の哥也。
一、「からかりし」とハ、くもゐのかり内府のひきこめ給ひし時、めのとのわれ〈18ウ〉あなづりて、六位すくせといひしこそからくおもひつれとの給ふ。めのともはづかしと思ひながらうつくしと見たてまつりてよめる也。
一、「ふたばよりなだゝるそのゝ菊なればあさき色わく露もなかりき」、夕ぎりはおさなくより名誉おハしましたりし人なれば、あさぎの色き給たるとてあなづりたてまつる心ハなかりつると大輔よめる也。「なだゝる」とハ、名誉也。あさぎハ、六位の袍の色也。心をきておぼしめすかといへる也。
一、「かゝるすまひも」とハ、つぼねずミにてハ所せばく、夕ぎりいきほひいかめしくなり給て、三条のミやにわたり給へる也。「ミやのおハしましし」とハ、うばミやのすミ給しだいに、夕ぎりすミ給へる也。
一、「せんざいども、ちいさき木なりし」、引、鬢緑千万白、池草八九緑、童稚尽成人、園林半喬木。「一むらすゝき」引哥、きミがうへしひとむらすゝきむしのねのしげきのべともなりにけるかな、〈19オ〉
一、「ふた所ながめ給て」とハ、雲井雁とふたり夕ぎりながめて、むかしと夕ぎりとかたらひしことはづかしく雲井雁おもひいで給へる也。「さうし〳〵」とは、つぼね〳〵にさぶらひけるふる人ども、まうのぼりて、うれしと思ひたる也。
一、夕ぎりよミ給へる也。「なれこそハ岩もるあるじみし人のゆくゑハしるややどのましミづ」なんぢこそ此ミやのあるじなれ、おほぢおとゞうばミやなどのゆくゑしりかとしミづにとハんと夕ぎりよミ給ふ也。「ましミづ」ハ、真清水也。くもゐのかりよミ給ふ。
一、「なき人のかげだに見えずつれなくて心をやれるいさらゐのミづ」、うばミやなどのかげハとゞまらで、ミづハ心なくさかほなるとくもゐのかりよミ給へる也。「いさらゐ」ハ、小水也。此うたなどよミ給ほどに、
一、内府よりまかで給ふが、もみぢにをどろかされてとてわたり給へる也。「むかしおハしましし」とハ、左府の御時にかハらず夕ぎりすミなし給へる也。〈19ウ〉
一、「中納言も」とは、夕ぎりも、内府のおハしたるに、をどろきて、せきめんし給へる也。「をんなハ、かゝるかたちのたぐひ」とハ、くもゐのかりのかたちのやうならんをんないくたりもあるべし、夕ぎりのかたちのやうならんおとこハありがたからんと内府見給ふ也。

一、「かミさびたる事ども」とハ、ふる人どもまいりて、むかしの物語ども さま〳〵にきこゆる也。「かミさびたる」とハ、ふるきことをいへる也。

一、「御てならひ」とハ、くもゐのかり夕ぎりのうたを内府み給て、「おきなは、こといミして」とハ、むかしのことハいま〳〵しきをいむとの給ふてよミ給へる也。

一、「そのかミのおひ木ハむべもくちぬらんうへしこまつもこけおひにけり」、左府大宮などなくなり給しハげにも也。夕ぎりくもゐのかりのかくおとなび給へるほどにと内府よミ給へる也。「むべ」ハ、げにも也。引哥、きミこずハかたミに見んとわがふたりうへしまつの木きミをまつらん、〈20オ〉

一、「おとこぎミの」とハ、夕ぎりの御めのと、宰相のきミ、むかしつらかりし事をわすれねば、したりがほにてよめる。「したりがほ」と、よき仕合がほなる心也。

一、「いづれをもかげとぞたのむふたばよりねざしかハせるまつのすゑ〳〵」、おひ人ども、かやうによミあつめたるを、夕ぎりハおかしとおぼす也。さいしやうきミの哥ハ、おさなくおハしましし時より、くもゐのかり夕ぎり、ともにおなじきミとわれたのミたてまつりしとよミたる也。「ねざしかハせる」ハ、ちぎりかハし給しすゑかハり給ハぬと也。

一、「をんなぎミ」とハ、くもゐのかりハ、はづかしとせきめんし給へる也。

一、「十月廿よ日のほどに、六条院に行幸あり。」康保三年十月廿三日、朱雀院に村上天皇行幸ありし例也。

一、朱雀院にも御せうそこみかどよりありければ、院さへ御幸ありければ、よにめづらしきことゝをどろく也。〈20ウ〉

一、「あるじの院がた」とハ、源氏も御心をつくして、御心まうけし給へる也。

一、まづのむまばのおとゞにて、ひだりみぎのむまつかさむまひきいでて、ひだりみぎのこのゑづかさ五月のきしやけいばのごとくあそばせて御らんある也。「あやめ、わかれず」とハ、そのきハもわかれず也。五月五日六日のあそびにゝたるの心也。

一、「みなのしんでん」とハ、むらさきのうへのすミ給へるかた也。

一、「ぜんじやうひき」と、たてのにしたるまんまく也。軟障とかく也。

一、「ミづし所」とハ、供御所をいへる也。主上の御膳所なれば、うがひなどめしつかふ也。「院のうがひ」、朱雀院のミづし所のうがひもめしたる也。わざとの御らんとはなけれど、すぎさせ給ふみちの御なぐさミにと也。

一、「にしのおまへ」とハ、中宮のおハしますかた心ことなるもみぢを御らんあるやうにと、らうのかべをくづし、中門ひらき、御らんある也。〈21オ〉

一、「御座ふたつよそひたり」とハ、主上、朱雀院の御座也。「よそひ」と、さうぞくしたる也。

一、「あるじの御座ハくだりたる」とハ、源氏の御座ハ平座なるを、せんじありて、主上のミざとおなじやうになをさせ給ふほど、めでたきと也。

一、「みかどハ、なをかぎりあるいや〳〵しさ」とハ、朝覲の行幸にハ帛の衿をしきて上皇を拜し給ふ也。さやうに源氏を拜してミせたてまつり給ハぬが不足なるとおぼす。朝覲の行幸とハ春あるをちうといふ、あきあるをきんといふ也。これハ、ちゝみかどをおがミ給へるぎやうかう也。ちゝみかどおハしまさねば、臣下を御らんずる也。「いや〳〵しさ」とハ、うや〳〵しさ也。うやまふこと也。源氏をうやまひ拜し給ハぬのミ、あかぬことに冷泉院おぼさるゝ也。

一、「いけのいをを、ひだりの少将とりて」とハ、うハ、御ぜんにてつかひて、〈21ウ〉御らんにそなへければ、ひだりの少将もてまいりたる也。たかかひハ、きたのにてつかうまつれるとりを、みぎのすけ御らんにそなへける也。これは、たかひのうかひにおとるにハあらず、當座の時宜也。

一、「おほきおとゞ」とハ、内府綸言うけ給ハり給て、てうじて御膳にまいらせ給へる也。

一、「みこたち」とハ、親王公卿の御まうけをも、めづらしくせさせ給へる也。

一、「がく所の人」とハ、楽人めして、まひかなであそばせ給たる也。

一、「わざとの大楽にハあらず」とハ、行幸にハ楽をもおほきにし給へども、此たびハ殿上のわらハべたちにまひつかうまつらせ給へる也。朱雀院のもみぢのが、れいのふる事をおぼしいづると也。

一、「賀王恩」とハ、楽の名也。「おほきおとゞの」とハ、内府の御をと子おもしろくまひ給ふ也。「うちのみかど」とハ、冷泉院のみかど御ぞかづけ給たる也。〈22オ〉

一、「おほきおとゞ」とは、内府庭上におりてぶたうし給ふ也。

一、「あるじの院」とハ、源氏、菊をおらせ給て、むかしせいがいはまひ給し時、内府とたちならび給しことを、おぼしいでゝよミ給へる也。「色まさるまがきの菊もおり〳〵に袖うちかけし秋をこふらし」、心ハ、内府ももみぢのがのあきを思ひいで給ふかと也。「色まさる」とハ、内府大政大臣になりまさり給ふにつけても、むかしの事おぼしいで給ふかと也。

一、「おなじまひにたちならび給し」とハ、せいがいはの時、源氏のかたてにてまひ給しを、「われも人にすぐれ」とハ、大政大臣にあがり給へども、源氏の上皇になり給たるにハをよバぬと内府おぼす也。

一、「むらさきの雲にまがへる菊の花にごりなきよのほしかとぞ見る」、慶雲寿星、尭の代の賀瑞也。冷泉院の御代をほめて〈22ウ〉内府よミ給ふ也。引哥、ひさかたのくものうへにてみるきくハあまつほしとぞあやまたれける、

一、「ときこそありけれ」とハ、源氏の時にあひ給へると内府ほめ給ふ也。引哥、あきをゝきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされる、

一、「やんごとなき家の子」とハ、まひ人みな摂家の子どもたちにてすぐれ給ひたると也。

一、「あをきあかきしらつるばミ」とハ、「あをきしらつるばミ」とハ、かりやすとむらさきにてそむる也。「あかきしらつるばミ」とハ、はじの木とあかねとにあくをさしてそむる也。これハみなまひ人のさうぞく也。ひだりはあか色、みぎハあを色也。「すわう、えびぞめ」ハ、したがさね也。「ゑびぞめ」ハ、あかむらさき也。〈23オ〉

一、「ひたゐばかり」とハ、てんくわんをひたゐにあてたる也。

一、「みじかき物ども」ハ、小楽をまひたる也。「楽所などをどろ〳〵しく」とハ、おほがくなどはせぬ也。

一、「うへの御あそび」とハ、御前の楽はじまりて、「うたつかさ」とハ、楽人どもめして、御ことゞもひかせ給ふ也。

一、「うだのほうしのかハらぬこゑ」とハ、わごんのめいぶつ也。此うだのほうしといへるわごんのこゑ、朱雀院めづらしくきかせ給てよませ給へる也。

一、「あきをへて時雨ふりぬるさと人もかゝるもみぢのおりをこそみね」、朱雀院わが御代にかやうなりし行幸なかりしと、うらめしげにおぼしめして、よミ給ひ給へる也。

一、「よのつねのもみぢとや見るいにしへのためしにひける庭のにしきを」、古院・朱雀院などの御代のれいにてこそあれと、わが〈23ウ〉御

代を卑下して、朱雀院（しゅじゃく）にの給ひしらせたてまつり給へる也。

一、「御かたち」とハ、冷泉院（れんぜいゐん）いよ〳〵ねびとゝのをり給て、たゞげんじとひとつのやうに見え給ふと也。

一、「中納言の」とハ、夕ぎり御ありさま、こと物ならず又冷泉院ににたてまつり給へるこそめざましけれと也。「めざましき」とハ、めずさまじきと也。

一、「めでたきけハひや」とハ、思ひなしにや、みかどハめでたくおハしますらん、夕ぎりハあざやかにほし（マヽ）き所ハまさりざまにみえ給ふと也。

一、「ふえつかうまつり給ふ」とハ、夕ぎりのふえいとおもしろしと也。

一、さうかのてん上人、ミはしにさぶらふ中に、弁少将（べんのせうしやう）のこゑすぐれたると也。さるべきと、かやうにむまれあひすぐれ給たる源氏〈24オ〉と内府の御中らひなると也。弁少将（べんのせうしやう）ハ、内府（だいふ）の二男（じなん）也。〈24ウ〉